

本学における今後のGPAを活用した学生指導に関する一考察

—平成27年度入学生の成績と出席状況から—

高 桑 秀 郎 幼児教育科

(2018年9月26日受理)

〔 要 約 〕

本研究では平成27年度入学生を対象に、2年間の成績をGPA化し、高校時代の成績との関係、出席状況との関係について調べ、GPA向上に向けた具体的な指導の一助とすることを目的とした。以下のことが示唆された。

- (1) GPAは1年次から2年次にかけて有意に下がった。また1科目当たりの欠席ポイントは学期を追うことに増えていった。
- (2) 短大でのGPAと1科目当たりの平均欠席ポイントは強い負の相関を示した。
- (3) 今回の調査では、GPAの向上には遅刻、早退、欠席を減らし、授業をしっかりと受けさせることが効果的と考えられる。

1. はじめに

大学教育を取り巻く環境は大きく変動しており、大学には、卒業する学生の質を保証し、大学が、組織として学生の学修を進められるような制度や仕組みを設け、それに合った指導、支援を行うことが求められている。そうした取り組みの一つに、評価方法としてのGrade Point Average (以下GPA) 制度の導入がある。

本学においても平成28年度入学者よりGPA制度の導入が決まり、平成30年度からは、GPAが2.0未満の学生に対して、担任より学習指導が行われるようになった。しかし、GPAがどのような要素によって変化していくかについて、本学ではまだ調査されておらず、単に成績が低いものは成績を上げるように学習活動を頑張るようという形式的な指導に留まり、GPAを具体的に向上させていけるかどうかはやや疑問である。本学の成績の実情と学生生活の関係は不明で、GPA制度の導入が先行した形となっている。

また短大における学習成果としてGPAを考えた際に、高等学校 (以下高校) 時代の成績やその学校の学力レベルに応じて、短大での学習内容の理解の程度や学習に向けた姿勢が変わる可能性は高い。高校時代の成績が短大の成績にどの程度影響を与えているのかその関係を調べ、関係性を明らかにすることも、学生個々の学習状況を理解し、適切な指導を行って行くために必要なことである。

そこで本研究では、2年間の成績が出ていた平成27年度入学生を対象に、2年間の成績をGPA化し、高

校時代の成績 (受験時に申請された評定平均値と出身高等学校の学科ごとの偏差値により求めた値) との関係、出席状況との関係について調べ、考察を行った。その上で今後の学生指導に活用するための一助となることを目的とし、その方向性についての考察を行った。

2. 対象ならびに研究方法

今回の対象は羽陽学園短期大学幼児教育科に平成27年4月に入学した学生で、同29年3月に卒業した102名を対象とした。

GPAは成績表から、100~90点のものを4、89~80点のものを3、79~70点のものを2、69~60点のものを1、59点以下単位未修得のものを0とした。

出席状況は1年次、2年次の出席簿から、欠席を1、遅刻、早退等を0.5とカウントし、欠席ポイントとしてカウントした。また公欠、公欠に準じた欠席 (実習の延期、就職試験) の表記のあるものについては、欠席ポイントから除外した。欠席ポイントの科目からは、実態の把握が困難な科目 (教育実習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、保育実習保育所、保育実習施設、保育実習Ⅱ・Ⅲ、社会福祉実習) と卒業研究は除いた。通年科目のGPAはその科目の終わりの期のものとして処理を行った。また通年科目の出席状況についてはそれぞれの期として処理を行った。

高校時代の成績については、入学試験時に提出された書類から評定平均値を抽出した。また各学校間の学力格差を均して比較を行うために入学者の出身校、出

身学科の学校偏差値¹⁾を参考に仮想の評定平均値を算出した。仮想評定平均値は以下のようにして算出した。

仮想評定平均値 = 学校偏差値 ÷ 50 × 本人の受験時の評定平均値

データの統計処理にはMicrosoft社のExcel2010を使用し、有意差の検定にはt検定を用いた（有意水準5%以下）。

3. 結果

平成27年度入学者の1年次・2年次を通算したGPAは 2.40 ± 0.41 であった（表1）。各学年で見ると1年次は 2.48 ± 0.42 、2年次は 2.30 ± 0.44 で、2年次になるとGPAは有意（ $p < 0.01$ ）に下がった。

1年次から2年次にかけてGPAが増えた学生は18名、変わらない学生は3名、減った学生は81名であった（表2）。

出席状況について欠席ポイントを見ていくと、1年次・2年次を通算した総欠席ポイントは 52.2 ± 41.2 （表3）、1科目あたりの平均欠席ポイントは 0.86 ± 0.68 であった（表4）。標準偏差が大きいことから個人差が大きいことがわかる。もっとも総欠席ポイントが大きい学生は211.5、1科目あたりの平均欠席ポイントは3.47であった。逆に2年間で欠席ポイントが0の学生（遅刻、早退、欠席がない）は1名であった。

出席状況を半期ごとに追っていく（1年前期－1年

後期－2年前期－2年後期）と総欠席ポイントの推移は全体で $7.1 \pm 8.6 - 12.9 \pm 12.6 - 16.5 \pm 13.1 - 15.6 \pm 11.3$ であった。

半期ごとに履修する科目数が異なるので、履修した科目1科目あたりの平均欠席ポイントの推移を見てみる（表4）と $0.39 \pm 0.47 - 0.70 \pm 0.69 - 1.16 \pm 0.93 - 1.59 \pm 1.10$ と半期ごとに1科目当たりの平均欠席ポイントは増えている。

1年次の学年通算平均欠席ポイントと2年次の学年通算平均欠席ポイントを比較すると、2年次になると有意（ $p < 0.01$ ）にポイントが増えた（表3）。同様に1年次と2年次の1科目あたりの平均欠席ポイントを比較しても有意（ $p < 0.01$ ）に欠席ポイントが増えていた（表4）。1科目当たりの欠席ポイントについては1年前期と1年後期（ $p < 0.01$ ）、1年後期と2年前期（ $p < 0.01$ ）、2年前期と2年後期（ $p < 0.01$ ）の比較でいずれも有意に平均欠席ポイントが増えていた。つまり、学期を追うごとに1科目当たりの遅刻・欠席数が増えていくことを示した。それを裏付けるように1科目当たりの平均欠席ポイントについて、1年次から2年次にかけての変化を見るとほとんどの学生が増えており、欠席ポイント0の学生を除き、1科目当たりの欠席ポイントが減った学生は6名のみで、残りの大半の学生は欠席ポイントが増える結果となった。

1科目当たりの平均欠席ポイントが1年次から2年次にかけて増えた群と減った群のGPAの変化につい

表1：各学年と通算のGPA

1年次		2年次		1・2年通算	
mean	SD	mean	SD	mean	SD
2.48	0.42	2.30	0.44	2.40	0.41

1年次GPAと2年次GPAには有意差あり（ $P < 0.01$ ）

表2：1年→2年のGPA増減の数

増	変化なし	減
18	3	81

表3：総欠席ポイントの推移

	1年次		2年次		1・2年通算	
	mean	SD	mean	SD	mean	SD
前期	7.1	8.6	16.5	13.1	52.2	41.2
後期	12.9	12.6	15.6	11.3		
学年通算	20.1	20.2	32.1	23.2		

1年次通算欠席ポイントと2年次通算欠席ポイントには有意差あり（ $P < 0.01$ ）

表4：1科目当たりの平均欠席ポイントの推移

	1年次		2年次		1・2年通算	
	mean	SD	mean	SD	mean	SD
前期	0.39	0.47	1.16	0.93	0.86	0.68
後期	0.70	0.69	1.59	1.10		
学年通算	0.55	0.55	1.33	0.96		

1年次通算平均欠席ポイントと2年次通算平均欠席ポイントには有意差あり（ $P < 0.01$ ）

1年次前期平均欠席ポイントと1年次後期平均欠席ポイントには有意差あり（ $P < 0.01$ ）

1年次後期平均欠席ポイントと2年次前期平均欠席ポイントには有意差あり（ $P < 0.01$ ）

2年次前期平均欠席ポイントと2年次後期平均欠席ポイントには有意差あり（ $P < 0.01$ ）

表5：1年次から2年次にかけて1科目当たりの平均欠席ポイントが増えた群と減った群のGPAの変化の比較

	減った群	増えた群
n	7	95
1年次GPA - 2年次GPA (mean)	-0.060	-0.188
SD	0.0215	0.0491

t=0.136 (両側) で有意差なし

表6：1年次から2年次にかけてGPAが上がった群と下がった群の1科目当たりの平均欠席ポイントの変化の比較

	下がった群	上がった群
n	81	21
1年次GPA - 2年次GPA (mean)	0.913	0.643
SD	0.4641	0.4139

t=0.105 (両側) で有意差なし

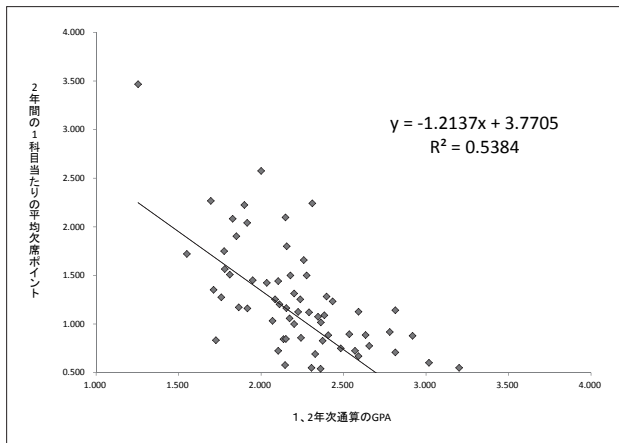


図1：GPAと1科目当たりの平均欠席ポイントの相関（1・2年通算）

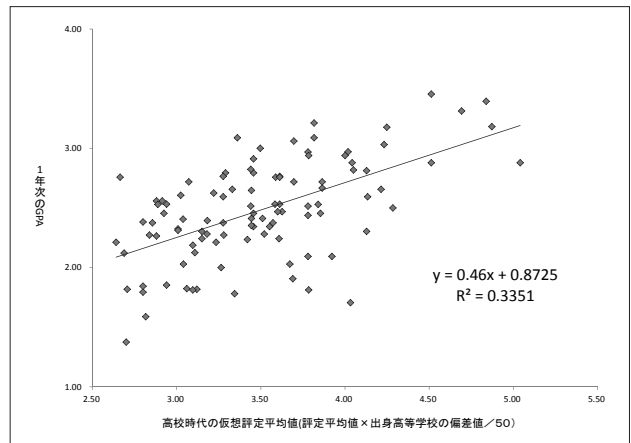


図2-1：仮想評定平均値とGPAの相関（1年次）

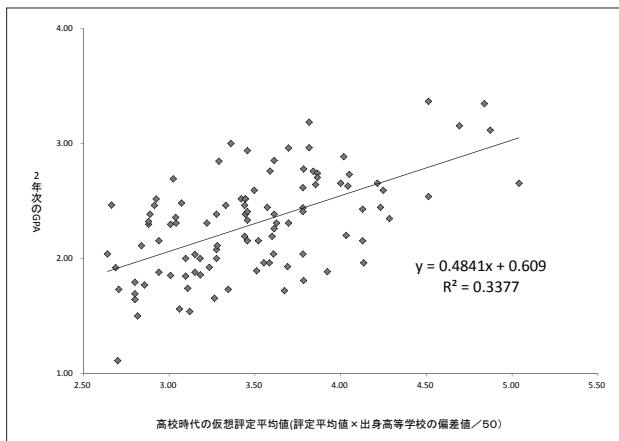


図2-2：仮想評定平均値とGPAの相関（2年次）

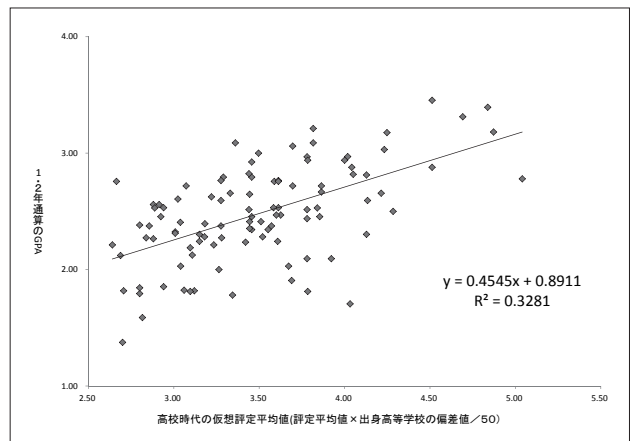


図2-3：仮想評定平均値とGPAの相関（1・2年通算）

て比較を行った（表5）。欠席ポイントが0の学生については減った群に入れた。いずれの群も1年次から2年次にかけてのGPAは低下した。両群間に有意差は見られなかったものの、1科目当たりの平均欠席ポイントが同様に1年次から2年次にかけて増えた群はGPAの低下が0.060で、減った群の0.188に比べてGPAの低下が少ない傾向を示した。

2年間を通した通算のGPAと2年間の1科目当たりの平均欠席ポイントの関係について相関を検討したところ（図1）、GPAが高いものほど、1科目当たりの平均欠席ポイントが低く、相関係数は-0.73と強い負の相関を示した。

逆にGPAが上がった群とGPAが下がった群とで1年次から2年次にかけての1科目当たりの平均欠席ポイントの変化については、いずれの群も増加した。有意差は得られなかったものの上昇した群の増加の平均値が0.63であるのに対し、下がった群の平均欠席ポイントの増加の平均が0.913とやや高い傾向を示した（表6）。

高校時代の仮想評定平均値と短大入学後のGPAの関係について相関を検討したところ、高校時代の仮想評定平均値と1年次のGPA（図2-1）、2年次のGPA（図2-2）、1年次・2年次を通算したGPA（図2-3）ともにそれぞれ中程度の正の相関が見られ

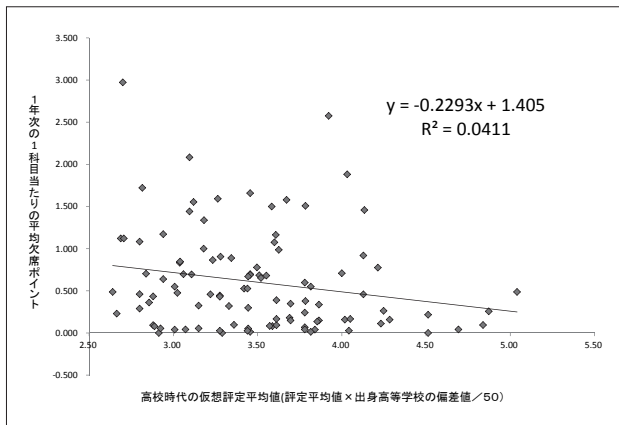


図3-1：仮想評定平均値と1科目当たりの平均欠席ポイントの相関（1年次）

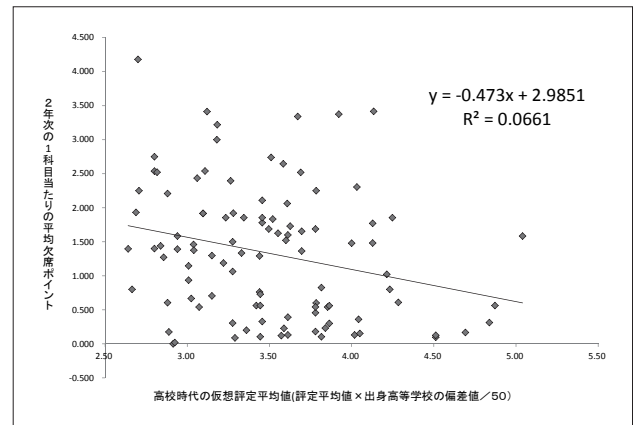


図3-2：仮想評定平均値と1科目当たりの平均欠席ポイントの相関（2年次）

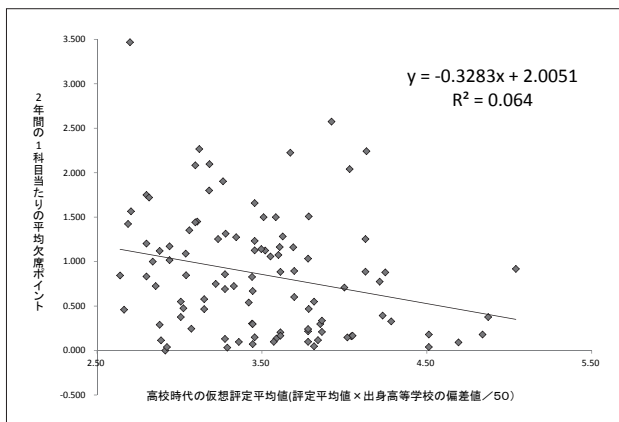


図3-3：仮想評定平均値と1科目当たりの平均欠席ポイントの相関（1・2年通算）

た。求められた相関係数はそれぞれ1年次GPAでは0.58、2年次GPAでは0.58、1・2年通算GPAにおいては0.57であった。

また高校時代の仮想評定平均値と短大での1科目当たりの平均欠席ポイントの相関を検討したところ、高校時代の仮想評定平均値と1年次の平均欠席ポイント（図3-1）、2年次の平均欠席ポイント（図3-2）、1年次・2年次を通算した平均欠席ポイント（図3-3）、にそれぞれ、弱い負の相関（相関係数：-0.20）、弱い負の相関（相関係数：-0.26）、弱い負の相関（相関係数：-0.25）が見られた。

4. 考察

今回の平成27年度入学者を対象にした調査では、本学におけるGPAは1年次から2年次にかけて下がることが分かった。下がる原因を追究しようと遅刻、早退、欠席をポイント化した欠席ポイントを用いてGPAとの関係を探った。

学期を追うごとに学年全体で1科目当たりの欠席ポイントが増えていくことが明らかになった。通算欠席

ポイントでは学期ごとに履修科目数が異なるので、単純な比較を行えないために、通算欠席ポイントを履修科目数で除した1科目当たりの平均欠席ポイントで比較を行った。

当初、1年次から2年次にかけて1科目当たりの平均欠席ポイントが増えた群と減った群とで、GPAの変化に差があるか（表5）や1年次から2年次にかけてGPAが下がった群と上がった群との間で、1科目当たりの出席ポイントの変化に差があるか（表6）で、統計的な差が見られるか検討を行った。しかし、1科目当たりの平均欠席ポイントが1年から2年にかけて増えた群は、減った、あるいは変わらなかった群に比べて1年から2年にかけて低下するGPAの値が大きい傾向を示したものの統計的な有意差は見られなかった。同様にGPAが1年から2年にかけて上がった群と、下がった群との間で、平均欠席ポイントの変化についても下がった群の方が、上がった群より平均欠席ポイントは高い傾向を示すのみで統計的な有意差は見られなかった。

そこで、2年間の通算GPAと2年間の1科目当たりの平均欠席ポイントの相関を調べたところ、GPAが高いものほど、1科目当たりの平均欠席ポイントが低いことが分かった。つまり、欠席ポイントが増える程、GPAは下がることを意味する。

学習時間と学力の関係には正の相関³⁾があり、文部科学省からの指導でも学習時間を確保できるように、シラバスに授業時間以外の学習についての記載を義務付けるようになっている。また先の論文³⁾では、授業出席時間と成績の間には学部によって、結果が異なり、むしろ授業時間より関連学習時間が学習成果を上げるとしている。これは授業に出席しても学習意欲が低い状態で臨むより、高い意欲で学習していることの

方が学習効果を上げることを指している。

しかし、正規の授業への出席率が下がることは、純粹に学習時間が減ることを意味するだけでなく、専門領域に関する新しい知見や学習課題に接する機会そのものを失うことを意味し、学習成果が得られなくなることは必然と言える。今回の結果から1年次から2年次にかけてGPAが下がる要因として、遅刻、欠席が増えていくことが大きく影響を与えていることは間違いない。成績改善に向けては、まず、正規の授業をきちんと受けさせることが第一と言える。同時に、学生の授業に対する意欲が高まるよう、受講姿勢が良くなるような働きかけが必要となってくるであろう。

他の要因としては、本学のカリキュラムは実習前に総論的なことや実技系の技能の修得を目的とした授業を行ってから実習に向かわせるという流れになっており、実習後は振り返りやより実践的な応用を求める内容が増えてくる。羽陽学園短期大学の平成27年度シラバス²⁾によると実習や卒業研究を除いた開講科目の学年ごとの状況を見てみると、講義は1年次に20科目開講されているのに対し、2年次では4科目、実技は1年次3科目に対し、2年次0科目、演習は1年次18科目に対し、2年次26科目となっている。2年次になると演習科目が中心になるカリキュラムとなっている。講義科目はペーパーテストにより高得点の結果を得やすいと考えられる。しかし、演習科目は講義科目に比べて、授業内での活動による課題の達成が評価の対象となることが多いことから高得点を取り難い可能性もある。しかし、それ以前に欠席ポイントが増えることは、そうした授業内での課題を達成できなくなるので、GPAが下がる要因としてはこちらの方が影響は大きいと思われる。

本学の学生一般の傾向として、人懐こい性格をしているが、教員との人間関係の近親さをはき違えて、なまなま慣れあいを求める学生も少なくない。2年になると遅刻して教室に入ってくるものも多く、授業が開始されていると、その都度授業を中断せねばならず、そうした意味でも教室内の学習環境は悪化し、遅刻していない学生に対しても授業での教授効率も下がるものと思われる。1年前期に見られない行動が、1年後期、2年次になると見られるようになってくるのは、学生生活に慣れてきたからか、授業に対する真摯な姿勢、学習に対する意欲等が下がっている可能性も考えられる。

そうしたことを考えると、1年前期から遅刻、欠席に対し厳しく対応し、授業への出講、出席状況・受講姿勢が良好な状態で2年間を過ごせるような指導を行って行くことがGPA改善に有効と考えられる。

高等学校時代の学力（学生の出身高校の偏差値と学生本人の評定平均値を考慮した仮想評定平均値）と短期大学でのGPAには中程度の正の相関が見られた。このことは短大での成績には高校時代の学力が関係していることを意味する。またこの仮想評定平均値と1科目当たりの平均欠席ポイントには弱い負の相関が見られた。仮想評定平均値が低いとより授業を休む、あるいは遅刻をする可能性が高いことを意味する。今回の研究では、仮想評定平均値が低いものがなぜ、1科目当たりの欠席ポイントが多くなっていくのかについてはその原因を突き止めることはできなかった。

本学に入学してくる学生の出身校は偏差値にも大きな開きがあり、その学生の学習への意欲や技能にも大きな開きがある。本学の授業内容は、専門職養成のためのカリキュラムが多いことから、高校までの5教科中心の学習内容とは異なってくる。しかし、新しく提供される知識を理解し、活用していくためには高等学校までの基礎的な学力を必要とすることも多く、特に文章の読解や記述に関しては、その能力を求められる科目も多い。実習関連の授業においては、日誌を中心とした記録の重要性、自分の意図を第三者に伝えることが求められる。まず、授業で提供される情報を理解できない、あるいはその重要性を認知できない、それらを行って行くのが困難だとするレベルの学生がいるとすれば、当然授業への参加意欲は下がっていくものと思われる。また、学習に対する努力にもかかわらず、評価が芳しくないとなれば、学習意欲が下がっていくことも予想される。

現在、本学ではリメディアル教育は導入されていない。基礎教養入門で学習方法や大学での学びについて、講義を行う教員もいるが、あくまで全体指導で、個別指導でないので、必要な学生はそうした情報を実感し、身に付けるに至らないと思われる。また、文章の稚拙さや誤字、脱字の多さは多くの教員から耳にする話題であるし、実際実習の巡回時にも指摘されることである。今後、文章の理解や文章の組み立てなど、言語力などについて入学後に一定の基準を設けた課題を与え、クリアできないものに対し、個別に指導していく方法も検討していかなくてはならないだろう。学生の時間の無さや教員の負担など、多くの課題は残るが、2年間、学習の方法に躓いたまま過ごさせるよりは、学生の成長を考えると必要である。

5. まとめ

本研究では、GPAをより良い実効的な学習指導に役立てることを目的とし、平成27年度入学生を対象に2年間の成績をGPA化し、高校時代の成績との関係、

出席状況との関係について調べ、考察を行った。

その結果、GPAは1年次から2年次にかけて有意に低下することが分かった。同時に1科目当たりの欠席ポイントは学期を追うごとに有意に増加していくことが分かった。そして2年を通じたGPAは1科目当たりの平均欠席ポイントが低いものほど高い、強い負の相関を持つことが分かった。

よって、本学でGPAを向上させていくための指導の一つとして、学生生活の中での出席率の向上、時間厳守、意欲的な受講姿勢を保つ等を徹底していくことが効果的であると考えられる。

また、高校時代の学力とGPAには一定の関係性があることから、低学力層に対し、入学後からの学習支援、リメディアル教育についても検討を行って行く必要がある。しかし、現状を考えると、教員、学生共に時間的な制約が増えることから、導入に向けて、双方に過負担とならないよう十分検討がなされた上で導入されるべきものと言える。

参考・引用文献

- 1) 高校偏差値一覧 (URL <http://高校偏差値.jp>)
2017年2月 閲覧
- 2) 羽陽学園短期大学 学生便覧別冊シラバス (講義概要) <幼児教育科・専攻科>2015 (平成27年度)
2015
- 3) 谷村英洋 大学生の学習時間と学習成果 大学経営政策研究第1号 p64-84 2011

謝辞

学生の成績表ならびに出席簿、短大入試出願時資料などデータを提供していただいた当時、本学教務課の今野清氏、塚原亜樹子氏ならびに松田知明学生部長に心から感謝いたします。

SUMMARY

Hideo TAKAKUWA:

A consideration about the Future Student Advising that Utilized Grade Point Average in Our Junior College
- From School Attendance and Record of Students who Entered in 2015 -

A purpose of this study is to investigate a method to utilize GPA for the learning results improvement of the students more effectively. I investigated the relationship with GPA of the student and the attendance to a lecture and the results of high school days.

- (1) GPA of the second grader significantly in comparison with time of first grader decreased. Whenever a term advanced, the absence points per one subject significantly increased.
- (2) GPA in the junior college and the means of point that students absence from class per one subject showed strong negative correlation.
- (3) As a result of this investigation, I suggest it is effective to teach to that a student take a class well and reduce the tardy of the student, leaving work early, absence, to improve GPA of the student.

(Uyo Gakuen College)